

心と身体の主観性、客観性について

総合人間学部 5 回生 種村徳也

1. はじめに

われわれは、言うまでもなく、心と身体とを合わせ持った存在である。本稿では、われわれの心と身体について、主観—客観という軸に照らし合わせた上で論じていく。

まずはじめに、哲学における心身二元論と心身一元論を論じることで、心と身体がそれぞれ主観、客観にどのように対応すると考えられてきたのかを見ていく。次に、医学（生理学、神経科学）や運動科学において、身体の主観性、客観性がどのように考えられているかを見ていく。その次に、心理学や精神分析学において、心の主観性、客観性がどのように考えられているのかを見ていく。そして最後に、現代社会において心や身体の客観性が主観性よりも重視されつつある風潮を指摘する。

2. 哲学：心身二元論と心身一元論

心と身体の関係について考えるとき、哲学の世界では、十七世紀にデカルトが提唱した「心身二元論」が長らく主流とされてきた。デカルトは、世界は精神と物体という全く異なる二つの実体からなると考えた。その上で、心はもちろん精神の側に、そして身体は物体の側に属すると考え、人間の心と身体とを全く独立した別々のものとして分離するに至ったのである。

それではまず、デカルトの二元論において精神と物体とがそれぞれどのような性質のものとして考えられていたかを見ていこう。まず、精神の本質的な性質は「考える」ということであり、認識するということである。そしてそこに、意思する、感覚する、感情を持つ、欲望するといったことも付帯してくる。一方、物体の本質的な性質は「広がり」を持つことである。そしてそこに、重さを持つ、運動する、形を持つといったことが付帯してくる。そしてこうした精神と物体とは完全に独立しており、その間には何ら共通のものがなく、まったく交通もないとデカルトは考えたのである¹。

この精神と物体との分離を人間に当てはめたとき、先程も述べたように身体は物体の側に分類され、その結果、精神（心）と身体とが完全に分離するに至る。それでは、身体から完全に

¹ 黒崎政男「身体にきく哲学」NTT出版、2005、p42~43

分離した精神とはどのようなものであろうか。そこではまず、「お腹がすいたから物を食べる」というように、身体に起因するような欲望や感情は排除され、超越論的に純化された純粹自我が現れる。物体である身体が世界の一部として存在するのに対し、このように身体から分離して究極的に純化された精神は、もはや世界の内には場所を持たなくなる。それは世界を成立させ、統制し、見渡すような「意識」であり、世界を観察する「主体」となるのである²。

一方、身体は重さを持ち、運動し、形を持つので、当然それは物体とみなされ、世界の一部として存在し、客観的に観察される対象となる。こうしてここに、「主体」である精神（心）と、「対象」である身体という分類が成立する。それは言い換えると、精神（心）は「主観として働くもの」であり、身体は「客観として見られるもの」であるとも言える。

精神と物体とを分離するデカルトの二元論は、その後の自然科学の発展の源となった。まず第一に、精神と物体とを分離することで、それまでの魔術的、オカルト的な世界観は一掃され、物体の世界は完全に厳密な因果関係と物理学的法則によって説明できるようになった³。そして更に、精神が世界から独立した純粹な主体となり、超越的な観察者となり、世界を客観的な対象として観察、分析することができるようになった⁴。

しかし、精神と物体の二元論を用いて人間を精神（心）と身体とに分離することは、大きな矛盾も招いた。例えば、心が悲しみにうちひしがれると、身体は涙を流す。デカルトの二元論によれば精神と物体との間には全く交流がないはずであるが、この例はどう考えても心が身体に影響を及ぼしているように見える。そこでデカルトは、苦肉の策として、人間の脳の中の松果腺という部分（当時その機能が判明していなかった）において、例外的に精神と身体とが連絡している、という説明をつけた⁵。しかし、この説明が苦し紛れのものであることは言うまでもないだろう。

このようなデカルトの心身二元論に対して、哲学の分野ではその後様々な反論が試みられた。精神と身体とを別々のものとする心身二元論とは逆に、精神と身体とをひとまとまりになったものとして考える考え方は、一般的に心身一元論と呼ばれる。

心身一元論を唱えた代表的な哲学者は、二十世紀に活躍したメルロポンティである。

メルロポンティは、従来のデカルト的二元論によって思惟する意識と対象としての身体とに分離させられてきた人間の心と身体を、何とか統一されたものにしようと試み、「私の身体」を持ち出す。それによれば、われわれが身体を認識するための唯一の手段は「自らそれを生きること」であり、「私とは私の身体である」と言える⁶。これは、「主体としての私=心」と考えて

² 同上 p49~52

³ 同上 p46~47

⁴ 同上 p52

⁵ 同上 p56

⁶ 同上 p61

身体を「主体としての私」から対象として分離したデカルト的二元論とは、全く異なる考え方である。

メルロポンティは、人間存在、そして人間の身体は主体でもあり客体でもあると考えた。例えば、「私の身体は<見るもの>であると同時に、<見えるもの>である」とメルロポンティは言う。目を使って外部を見るものとしての身体は主体であり、他者によって、あるいは自分自身によって見られる存在である身体は客体である⁷。また、メルロポンティは次のようにも言う。例えば右手と左手を握っているときに、手は触る手でもあるが触られる手でもある。触る手というのは対象を感覚し、知覚していく主体の側であり、一方で触られる手の方は、主体によって知覚される対象の側、客体の側である⁸。

このように、メルロポンティによれば、人間の身体は心（＝主体）と身体（＝客体）とに分離すべきものではなく、心と身体とは一体であり、身体は主体と客体の両方になり得る性質を持っていると言える。対象として捉えられた身体は「客観的身体」であり、その根底に、われわれによっていわば内側から主体的に生きられている身体、「現象的身体」が存在するのである⁹。

また、解剖学者である養老孟司は、自らの「唯脳論」に基づき、心と身体とを分離して捉えてしまう原因は脳にあると説明し、心と身体とがそもそも分離して存在するものであるとする考えを否定する。

養老によれば、まず、脳の中の感覚系を代表するものとして視覚と聴覚が存在し、この二つの感覚は基本的に対立する性質を持つ。視覚で把握されるものは、形を持つ。それに対して、聴覚で把握されるものは形を持たない。音には形がないのである。このようにして、概念の中には、視覚に由来する形を持つ概念と、聴覚に由来する形を持たない概念とが発生する。ちなみに、言語は、形を持つ視覚と形を持たない聴覚とが共同して作り上げたものである。

そして、人間という一つの存在を考えたとき、視覚系とそれに由来する脳の部分を中心に認識すれば、それは形を持つ「身体」となる。一方、聴覚系とそれに由来する脳の部分を中心に認識すれば、それは形を持たない「心」となる。このように、養老によれば、心と身体との分離は観察者であるわれわれの脳の性質によって生じるものであり、心と身体が本質的に分離したものとして存在しているわけではないのである¹⁰。

⁷ 同上 p36

⁸ 同上 p67

⁹ 同上 p62

¹⁰ 養老孟司「日本人の身体観」日本経済新聞社、2004、p88~89

3. 医学、運動科学：客観的な身体と主観的な身体

前章で述べたように、自然科学はデカルトの心身二元論に起源を持つ。そこでは、物体は精神から切り離して考えられ、オカルト的な世界観は排除され、物体は厳密な法則に従って動き、客観的に観察される。この「客観的」というのは、自然科学にとって非常に大事な概念である。観察者の「主観」によって記述されたものは、一般的に自然科学として認められない。自然科学においては、対象が客観的に記述され、同じ条件で誰が（どのような主観を持った人が）実験しても再現可能であり、検証可能であることが求められるのである。

医学、生理学、運動科学といった、身体を扱う科学についても、基本的には同じことが言える。身体は物体と同じような対象として扱われ、身体に関する情報が各種データや数字に還元され、物体を解析するのと同じように、身体が客観的に解析、分析される。このように、一般的な科学においては身体を客観的なものとして、すなわち「客観的な身体」として扱っている。

しかし、実際には、このような「客観的な身体」だけが身体ではない。われわれは自分の身体を常に客観的に見ているわけではない。直に伝わってくる感覚を元にして、身体を主観的に捉えてもいる。このような、われわれの心、脳、あるいは主観的思考と言い換えても言いだろうが、そういった中に存在する、主観的な身体のイメージというものがある。「客観的な身体」に対して、これは、「主観的な身体」であると言えるだろう。

前述のように、従来の科学では客観的な身体のみが扱われてきたのだが、近年、主観的な身体の方にも着目し、両者の間に生じているズレを探る研究も行われている。例えば、神経科学においては、「主観的な身体」を「脳の中で形成される身体像」として捉え、脳のメカニズムを研究することによって、その解明を目指す。

ここでは、幻肢という現象を例として取り上げる。幻肢とは、実際は事故や外科手術などで失われたにも関わらず、なぜか患者の心の中から消えずに残る腕や脚などのことを言う。こうした患者は、実際にはないはずの腕や脚が存在するという感覚をありありと感じ、それを動かすこともできる。それどころか、この幻の腕や脚に激しい痛みを感じることもある¹¹。南北戦争の後、大勢の負傷兵によってこうした現象が訴えられ、サイラス・ワイアー・ミッチェルという医師によって初めてこの現象は報告され、「幻肢」という名前を与えられた¹²。

V・S・ラマチャンドランによれば、幻肢が起こる原因は主に二つある。

一つ目は、脳における身体地図の再配置である。われわれの脳の中の特定の部位を刺激すると、身体の中の特定の部位において感覚が生じる。そして、脳の中のどの領域が身体の中のどの部

¹¹ V・S・ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー著、山下篤子訳「脳のなかの幽霊」角川書店、1999、p53

¹² 同上 p54

分の感覚に対応しているのかを調べていくと、脳の中に身体表象の地図を描くことができる¹³。幻肢を持つ患者では、この脳の中の地図が書き換えられており、その結果として幻肢が生じると考えられる。例えば、手を失った患者の脳の中では、脳の地図における「手の領域」は、その隣に位置する「顔の領域」から浸食されている。手を失ったことで手からの情報入力途絶えた結果、脳の地図における手の領域は空いた状態となり、その隣に位置する顔の領域がそこに侵入し、その部分のニューロンを活性化するようになったのである。その結果、患者は顔を触られると、まるで実際はないはずの手を触られたように感じるのである¹⁴。

幻肢が起きるもう一つの理由は、脳の頭頂葉における身体像（身体イメージ）から説明できる。例えば、目を閉じて身体を動かしたとき、われわれは自分の身体感覚や手足の位置と動きを生き生きと覚えることができる。このようなわれわれの内にある身体イメージを「身体像」と言う。そして、この身体像を作り、維持するために、脳の中の頭頂葉という部分が、多くの情報源（筋肉、眼、運動指令の中核など）から入る情報を結びつけているのである¹⁵。幻肢を持つ患者の場合、幻の腕を動かそうとすると、脳の中の運動野が「腕を動かせ」という指令を出す。この指令は頭頂葉でモニターされ、動きとして知覚される。そのため、頭頂葉の身体像においては、失われたはずの腕が動いているように感じられるのである¹⁶。

幻肢を持つ患者の中には、麻痺して硬直した幻肢を持つ人もいる。こうした人達は、一度実際の腕や脚が麻痺した状態でしばらく生活した後で、腕や脚を切断した場合が多い。彼らの脳は、実際に腕や脚が麻痺していたときも通常通り腕や脚を動かす指令を送り、その指令は頭頂葉でモニターされていたのであるが、一方で、実際に腕や脚が動くという適切な視覚のフィードバックを受けることはなかった。そのため、脳は腕や脚が動かないことを学習し、「学習された麻痺」が脳の中に刻印された。そして、その腕や脚が後に切断されたとき、その人の脳の中には「麻痺した幻肢」という身体像が残ったのである¹⁷。ラマチャンドランの実験によれば、鏡を使うことによって、患者に対して幻の腕が実際に動いているように見せかけることができれば、幻肢の麻痺を取り除くことができる。視覚のフィードバックが、「麻痺した幻肢」という身体像を打ち破るのである¹⁸。

このように、誰の目にも見える「客観的な身体」だけでなく、本人しか知覚することのできない「主観的な身体」が存在することが、この幻肢の例からは分かる。実際に存在する腕の痛みを取るのと同じ方法を用いても、患者の「主観的な身体」である幻の腕の痛みを取り去ることはできない。「客観的な身体」のみを考えていては解決できない問題が、身体の領域には存在

¹³ 同上 58

¹⁴ 同上 p61

¹⁵ 同上 p78

¹⁶ 同上 p79~80

¹⁷ 同上 p80

¹⁸ 同上 p82

するのである。

神経科学においては、「主観的な身体」は脳の中の身体地図や頭頂葉の身体像によって形成されるものとして扱われる。「主観的な身体」は本人にしか知覚できず、他人の持つ「主観的な身体」をわれわれが直接的に扱うことはできない。しかし、脳という客観的に観察可能な対象を調べることによって、そのような「主観的な身体」を間接的に扱うことはできるのである。

次に、運動科学の分野においても、他の一般的な科学と同じように、基本的には「客観的な身体」が扱われているわけであるが、それだけではあまり実践的であるとは言えない。運動科学の実践、すなわち実際のアスリートに対して運動科学に基づいたコーチングをするとき、アスリート自身の持つ「主観的な身体」の感覚と、運動科学の「客観的な身体」の理論との間にズレが生じる場合があるのである。

陸上のスプリントを例に挙げる。スプリント選手の走る動作を細かく分解し、世界トップクラスの選手と日本の選手の走り方の違いを分析したところ、世界トップクラスの選手の方が、脚を後方に振り戻す速度が速いことが分かった¹⁹。ももを上げる動作や膝から下に脚を振り出す動作は脚を前方へ持っていき動きであるが、これだけでは体重は前に移動しない。地面に着いた脚を後方に振り戻すときに地面を後方に押すことによって、その反作用で身体は前に進むのである²⁰。こういったことは、客観的な運動科学から得られた知見である。

しかし、実際に走るときにこのような脚の後方へのスイングを意識してしまうと、走る速度は逆に遅くなってしまいます。後方スイングを速くしようと意識しすぎてしまうと、最前に来たときの足先はどうしても地面から高い位置に来てしまい、そこから接地までの局面において、足先が手前に引き戻されながら下りてくる形になってしまいます。そして、そうすることで脚がターンオーバーせずにターンラウンドしてしまい、結果的に脚の後方へのスイング速度は遅くなってしまいます²¹。後方スイングを速くしようと意識しすぎた結果、逆に後方スイングが遅くなってしまったというのは、実に皮肉なことである。これは、「速く走るには脚の後方スイングを速くする必要がある」という運動科学から得られた客観的知見、「客観的な身体」の知見を、「脚の後方スイングを速くしよう」という選手の主観的な意識、「主観的な身体」へとそのまま置き換えてしまった結果、生じた問題である。

一方、カール・ルイスのコーチとして知られるトム・テレッツは、脚の後方スイングを強調しない。それどころか、後方スイングを意識してはいけないと教える。テレッツによれば、速く走るために意識すべきことは、「脚を真下に踏みつける」ことと、「脚をターンオーバーさせる」ことである²²。そして、こうすることで、結果的に脚の後方スイングの速度は速くなる。この

¹⁹ 小田伸午「身体運動における右と左」京都大学学術出版会、1998、p211

²⁰ 同上 p213

²¹ 同上 p217

²² 同上 p215

ように、「客観的な身体」の分析から得られた知見を、それとは全く異なる主観的な表現で選手に教えることにより、選手の「主観的な身体」に客観的に見ても正しい動きをさせることができたのである。

客観的に得られた知識を主観的な意識にそのまま持ち込んではいけない。だからと言って、何の客観的な知識も持たずに自分の経験だけを元にした主観的な方法を教えてもいけない。大切なのは、客観的に得られた知識が主観的な意識や感覚とどのように関わるかを考え、客観的知識を主観的意識にうまく変換して置き換えることなのである²³。「客観的身体」を自らの「主観的身体」と融合させる、と言い換えることもできるだろう。

もちろん、客観的知識を主観的意識に変換する方法は、人それぞれで異なってくる。前述したテレツは「脚を真下に踏みつけ、ターンオーバーする」ことを意識するように説くが、日本を代表する陸上選手である朝原宣治は、「地面に乗る感じ」を意識しているという。表現は違うが、どちらが正しいという問題ではない。それはあくまでも個性であり、それぞれの人が自分の個性に合った形で、客観的知識の主観的意識への変換を行うのが望ましいのである²⁴。

4. 心理学：客観的な心と主観的な心

デカルトの二元論における精神と物体の分類のうち、客観的に認識できる物体の側を扱うのが、いわゆる「デカルト以来の自然科学」であった。しかし、20世紀に入ると、精神（心）の側を科学的に扱う学問が一躍隆盛を極めた。それが、心理学である。

心理学は、あくまでも科学である。そのため、他の一般的な科学と同様、対象を客観的に扱うことを目指している。デカルトの二元論に当てはめると、物体の世界から独立した精神、すなわち「主観的な心」を扱うのではなく、心を物体の側に引っ張ってきて、物体と同じように客観的な対象として記述できる「客観的な心」を扱うのである。もちろん、実際は、目に見えないものである心を純粋に客観的な対象として扱うことは難しい。しかし、それでもできる限り心を客観的な対象として扱おうとするのが、心理学なのである。

一方で、こういった一般的な心理学と一線を画す分野もある。それが、フロイトを祖として20世紀はじめに誕生した精神分析学である。もちろん、精神分析学が客観性をおろそかにしているというわけではない。しかし、一般的な心理学のように心をできるだけ客観的なものに還元して「客観的な心」を考えようとするのではなく、心における主観的な部分、「主観的な心」

²³ 同上 p255~257

²⁴ 同上 p224~225

の方も重視しようとするのが、精神分析学の方法論なのである。

例えば、精神分析治療を行う中で、患者がそれまで忘れていた（無意識に抑圧されていた）幼少時に受けた心的外傷（トラウマ）を思い出す、という自体がしばしば起こる。しかし、これだけでは、この心的外傷を受けた体験が実際にあったことなのかどうかは分からない。この外傷体験の有無は、決して客観的に正確なものだとは言いきれない。いや、それどころか、実際にはそのような外傷体験の事実はなく、患者が無意識のうちに作り出した「偽の記憶」である場合も多いのである。よって、客観的に物事を捉えることを重視する科学的な立場では、このように検証不可能な外傷体験を患者の症状の原因とすることはできない。

しかし、精神分析では、この外傷体験が客観的に見て事実であるかどうかはそもそも問わない。たとえそれが実際に起こったことではないとしても、患者の心の中にそのような外傷体験の記憶が浮かび上がってきたという事自体は、事実である。それは、少なくとも患者の「主観的な心」の中では、現実起きた出来事と同じだけの価値を持つのである。これを精神分析用語で「心的現実」と言う。そして、この心的現実が客観的な現実と同じように、患者の症状に影響を及ぼしていると考えるのである²⁵。

そもそも、精神分析学で扱うのは、人の心の中の「無意識」である。無意識は通常閉ざされており、その名の通り、意識によって把握することはできない。そのため、例えば、一般的な心理学で用いられているような「〇〇のとき、あなたはどう思いましたか」というようなアンケート項目による「客観的な把握」は意味を持たない。そのような質問に対する回答は、あくまでも意識に上っている感情であり、無意識にまで踏み込んではいないからである。

精神分析の治療は、通常、患者と分析家が一対一で「話す」ことによって進められる。患者は様々なことを語り、分析家はそれを聞き、患者の思考の歩みを導く。こうした中で、患者と分析家との間に特別な感情の結びつき（転移）が生じる²⁶。そしてそこから、自我心理学的な手法を用いる分析家であれば、分析家の持つ強い自我に患者の自我を同一化させようとする。あるいはラカン派的な手法を用いる分析家であれば、分析家の中の空（くう）の欲望（あるいは、欲望における空）を患者に受け取らせることを目指すだろう。いずれにしても、こうした過程で起きる具体的な事柄は、患者と分析家との間での極めて個別的な出来事であり、普遍性にも再現性にも乏しい。患者が変われば、あるいは分析家が変われば、そのつど分析治療の実際の中身も変わるのである。

こうした精神分析の手法に対し、「客観性に乏しい」「精神分析は科学とは言えない」という批判もある。いずれにせよ、精神分析は一般的な科学的手法からは一線を画し、「客観的な心」だけでなく、「主観的な心」も重要視する学問なのである。

²⁵ S・フロイト著、懸田克躬訳「精神分析学入門Ⅱ」中央公論新社、2001、p212

²⁶ S・フロイト著、懸田克躬訳「精神分析学入門Ⅰ」中央公論新社、2001、p9~10

5. 現代社会における主観と客観

最後に、現代社会において心や身体がどのように捉えられ扱われているかを、主観—客観という軸に照らし合わせて考えていくことにする。

現代社会は、科学からの多大な恩恵を受けている。科学は加速度的に発展し、われわれの身の周りにある多くの事柄を解き明かし、また、われわれの暮らしを便利にする新しい発明を次々と生み出してきた。まさしく、科学のおかげでわれわれは今日のような便利な社会を実現するに至ったと言える。

そういう意味で、現代社会にはあらゆる所に科学があふれていると言え、それと同時に、科学的な思考法も世の中にあふれるようになった。このこと自体は決して悪いことではない。しかし、それがあまりにも行き過ぎると、しばしば問題が生じることになる。

科学的な思考法とは、本稿の**3**でも述べたように、客観性を重視する思考法である。それを心や身体に当てはめると、「客観的な心」や「客観的な身体」が重視されることになり、逆に言えば、「主観的な心」や「主観的な身体」が軽視されることになる。それは例えばどういったことなのか、以下で見よう。

哲学者の黒崎政男は、バイオメトリックス認証を例に挙げて、「物質としての身体」が「私」を疎外する事態を論じている。二十一世紀に発達したバイオメトリックス認証というテクノロジーは、私の気づかないところで、私が私であることを、例えば顔の形や静脈の形や目の虹彩の形といったものから判定してアイデンティファイする。私の意識とは無関係に、物質としての身体にテクノロジーが働いて、「私」を規定するのである²⁷。この事態は、最新のテクノロジーが「客観的な身体」を重視するあまり、「主観的な心（意識）」や「主観的な身体」を疎外し、更に言えば主体としての「私」を疎外していると言える。われわれの「主観的な心」が「私は私である」といくら思っている、あるいは「これは私の身体である」という「主観的な身体」の感覚がいくらあっても、テクノロジーによって読み取られる「客観的な身体」の物質的情報がそれを否定すれば、私が私でなくなってしまうのである。

更に黒崎は、脳科学の進展も例に挙げている。現在の脳科学が目指しているのは、われわれの意識内容や判断内容を外側から脳反応として見ることである。そして、様々なテクノロジーを使って、リアルタイムで脳の状態を見ることによってわれわれの意識を測ろうという方向へ、脳科学は急激に進んでいる²⁸。さすがに、このようなテクノロジーはまだわれわれの日常生活

²⁷ 岩崎政男「身体にきく哲学」p15~16

²⁸ 同上 p25~26

の中には入り込んでいない。しかし、もしこのようなことが実現すると、脳という「客観的な身体」、そしてそこから読み取られる「客観的な心」によって、われわれの「主観的な心」が規定されてしまうということになるだろう。

生命科学者の加藤和人は、生命科学の進歩が人間観や生命観に与える影響を論じている。生命科学は、生命を「機械」として捉え、それを構成する「部品」を解き明かす、という考え方向に向かいがちである。最新の生命科学においては、クローン技術やそれを用いた再生医療が急速に実現されつつあり、特に胚生幹細胞（ES細胞）という、役割が未分化で、逆に言えばあらゆる器官になり得る細胞を用いると、原理的にはあらゆる「部品」を人間の手で作りに出せることになる。これを利用すると、例えば身体のどこかの部分が病気になっても、その病気になった「部品」を取り出し、胚生幹細胞を用いて作った新しい「部品」と取り替えることによって治療することができる。このような技術の発展自体は、確かに素晴らしいことである。しかし、このように身体の「部品」が置換可能であるということは、そうした「部品」の集合である個体が置換可能であるということ、ひいては個々の存在それ自体の「部品」化につながりかねない、と加藤は警鐘を鳴らす²⁹。加藤によれば、生命はこのような「部品」によって構成される「機械」であるのと同時に、「歴史的存在」でもある。一つ一つのパーツに始まり、パーツにより組み上げられる細胞や器官、その集合である個体、個体の集合である種や生態系、そういったものは全て長い年月をかけて何世代にも渡り作り上げられていったものであり、「歴史性」を持っている。生命を取り替え可能な「部品」としてみなす風潮が次第に広まりつつある中で、「歴史性」によってもたらされる個々の個体の「かけがえのなさ」を忘れてはいけない、と加藤は言う³⁰。これは言い換えれば、「部品」の集合としての身体は「客観的な身体」であり、「かけがえのなさ」を持った個体は、「主観的な心」と「主観的な身体」を合わせた「私という主体」であると言えるだろう。

このように、現代社会においては心や身体を「客観的な心」、「客観的な身体」として捉える風潮が強まっている。科学的な考え方をを用いて「客観的な心」、「客観的な身体」を分析すること自体は、もちろん悪いことではない。そのようにして様々な科学的、客観的知見が生み出され、それが結果的にわれわれの生活をより便利で豊かなものにするのであれば、それは素晴らしいことである。しかし、言うまでもなく、われわれは「客観的な心」と「客観的な身体」だけを持って生きているわけではない。われわれは同時に、「主観的な心」と「主観的な身体」も持っているのである。必要以上に「客観的な心」、「客観的な身体」を重視し、「主観的な心」、「主観的な身体」を軽視するのは好ましくないだろう。

われわれは、まず、自らが心と身体とを合わせ持った存在であることを思い返し、さらに、

²⁹ 菊池暁編「身体論のすすめ」丸善、2005、p144

³⁰ 同上 p150

心も身体も客観的に捉えられるのと同時に主観的にも捉えられることを思い返すべきである。そしてその上で、心や身体を扱うときは、主観と客観が分離するのではなく最終的に融合できるような方向を目指していくべきであろう。

(参考文献)

黒崎政男「身体にきく哲学」NTT出版、2005

養老孟司「日本人の身体観」日本経済新聞社、2004

V・S・ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー著、山下篤子訳「脳のなかの幽霊」角川書店、1999

小田伸午「身体運動における右と左」京都大学学術出版会、1998

S・フロイト著、懸田克躬訳「精神分析学入門Ⅰ」中央公論新社、2001

S・フロイト著、懸田克躬訳「精神分析学入門Ⅱ」中央公論新社、2001

菊池暁編「身体論のすすめ」丸善、2005